はたらく女性のフロア通信

発行日　2013年12月25日

NO. 17

はたらく女性のフロアかながわ（WWFK）

〒221-0855　横浜市神奈川区三ツ沢西町８－２５－２０３　本間重子気付

電話／FAX　０４５（３２３）０６５３　E-mail　wwfk@hotmail.co.jp

HP　http://www3.plala.or.jp/wwt/wwfk.html

川崎市長選挙のご支援ありがとうございます!

会員 君嶋 千佳子

「川崎民主市政をつくる会」から川崎市長選挙に立候補しました。マスコミ含め期待されながら（？）当選には至りませんでした。本当に残念！

でも私たちが「大型開発と行革に決別し、子育て・福祉・市民生活最優先」を最大の争点とすることにより、阿部行革市政の継承者を当選させなかったこと、また他候補の政策に私たちの主張を反映させたことはよかったと思います。

―他候補の変化―――

そのひとつ、中学校給食の実施は、私自身も取り組んできた新婦人や教職員連絡会などの要求運動、また共産党市会議員団の取り組みなどが基盤になっていますが、私の訴えを通じて、他の候補者も取り上げざるを得なくなりました。

その結果、当選した福田氏は所信表明演説で学校給食の早期実施を明らかにしました。彼は「民間の力を活用し市のお金は使わない（使わないで出来る訳はないのですが！）」とし、選挙中はPFI方式を掲げていました。しかし今は、手法については他の方法も検討対象とするとしています。（ある情報ではPFI方式はお金がかかるということを知ったらしいと）

また少人数学級を掲げる私に対し、彼は習熟度別クラスを主張していました。これについても、様々な批判などを受け彼の主張は度々揺らぎ、少人数学級も僅かながら視野に入りつつあります。（公開討論会で私が習熟度別クラスの批判をした際、現場には習熟度別の支持者は多いと強気でしたが）

―手応えと楽しさと―――

このような選挙戦のダイナミズムも含め、立候補表明以来の４か月はとても手応えのあるものでした。

その第一は市民との触れ合いです。初めて会った人が話し終えた私の手をとって涙を流す、また別の男性も「変えて欲しい」と言いながら、涙で言葉が詰まる･･･こんな場面が少なからずありました。12年間の市政はここまで市民を追い詰めているのだと思いました。

第二は、特徴をもった各地域を知り、様々な実態を見る機会を得たことです。実態を知る程に無謀な開発をやめさせ、中小企業や地元商店街の支援を、という思いは募りました。

そして最後に、選挙をともに戦った仲間との気持ちの通い合いです。行く先々でたくさんの励ましや心遣いに出会い、「人間てこんなにも優しいものか」と熱いものがこみ上げてくることも度々でした。

選挙戦とは、かくも思いが詰まったものなのですね。皆さん、本当にありがとうございました。

WWFK望年会から

12月16日18時から横浜の中華料理店「煌蘭　横浜店 」で開催しました。10名が参加しました。君嶋さんの川崎市長選奮闘記を聞きました。君嶋さんは、「終盤に近づくほど、楽しさが増してきた」「首長は当選すればなんでも思うことが市政に活かせる。どうせ負けるからではなく、勝ちに行くことが大事」と強調しました。本当にそう思います。

今年は、安倍政権になってから国家機密法の強行採決など、横暴が目立つ年でしたので、一同、今の政治を何とかしなければという思いを新たにしました。

ベトナム平和ツアー

大国の侵略とのたたかいの連続だった

会員　佐久間　由美子

10月4日～9日、今回の旅のテーマは「平和」、ベトナム戦争の歴史をたどり、少数民族の村を訪ね、「平和の鐘」梵鐘式に参列するという欲張りな内容だった。

＜ハノイ＞

ベトナムは長く中国に支配されてきたが、その間３回元寇の襲撃を受けた。最初は台風で、2回目はバクダン江に杭を打ち、満潮に乗って進軍してきた元寇の船を引き潮で座礁させ、3回目も同じ方法で追い返した。1428年中国から独立したが、1884年フランスに編入され、1940年日本軍が進駐、1945年日本の敗戦でベトナム民主共和国を樹立、しかし、1946年フランスが再び進駐、ディエンビエンフーでフランス軍が敗れ、1955年ジュネーブ協定で南北に分断。ベトナム戦争では勝利し、南北統一したが、再び中国が侵攻、これも追い返した。小さなベトナムに大国が次々と攻撃を仕掛けてきたが、不屈の精神で打ち勝ってきたのだ。

アメリカの空爆の標的にされたロンビエン橋は今も健在、狭い道に列車もバイクも人もひしめくように通行している。ミサイルで撃ち落とされた米軍のＢ52が落ちたところがヒュー・ティエップ湖、今も残骸が池の真ん中に突き刺さっている。空爆の米軍機はミサイルで半分以上撃墜したという。

ロンビエン端

ベトナム戦争当時、北ベトナムの総司令部「D67」は古城内につくられ、空爆時には地下壕に移動した。この地下の司令部が保存、公開されている。北ベトナム政府はスパイから北爆の情報を得、市内に張り巡らした地下壕に避難することで、犠牲者は最小限に抑えられた。カムティエンの母子像は北爆の犠牲者の慰霊と平和を願って建てられた。

枯葉剤の被害者のための施設「ハノイ友好村」は日本・ドイツなど5カ国の民間団体等による支援で設立運営されている。戦争が終わっても、未だに枯葉剤による障害児が生まれていることはやり切れない。しかし職業訓練に真剣にとりくんでおり、浮世絵の刺繍の腕前が素晴らしい子には、賞賛の声が上がった。皆恥ずかしがり屋だけど、人懐っこく、私たちを歓迎してくれた。

日本軍が米を持ち去ったために200万人の餓死者を出した。小さな2階建ての慰霊堂がある餓死記念碑は改修工事中だった。

＜ディエンビエンフー＞

ハノイから飛行機で約1時間、中国国境に近いディエンビエンフーは、四方を山に囲まれている。1954年膨大な近代兵器で武装したフランス軍との戦いに勝利し、ベトナム独立への転換点といわれる歴史的なところである。この戦いではベトミン軍（ベトナム独立同盟会）が、大量のミサイルなどの武器弾薬を「人力」や「自転車」などにより運びあげ、フランス軍を壊滅させたという。交通の要所だった「旧オムタイン橋」は現在も使われており、フランス軍「カストリーの司令部跡」が保存されていた。

Ｄ６７地下司令部

ディエンビエンフーには少数民族の黒タイ族が住んでおり、宿泊したホテルでは黒タイ族の歌と踊りで歓迎してくれた。私たちも「故郷」「結んで開いて」を歌い、ストローで飲むかめ酒がふるまわれ、バンブーダンスまで踊り、楽しく交流した。翌日は黒タイ族の部落を訪ねた。

＜「平和の鐘」梵鐘式＞

日本軍が持ち帰った鐘が1977年銀座で発見され、返還運動により持主である五戸寺に返還された。ところがその後中国侵攻の混乱の中で再度行方不明となり、その後の捜索でバクニン省博物館に保管されていた鐘が発見された。

「平和の鐘」梵鐘式

バクニン省博物館での法要式には、五戸寺の住職をはじめ、日本とベトナムの関係者が100人ほど集まり行われた。最後に両国の友好と平和を願い、全員で鐘を打ち鳴らした。五戸寺は小さな尼寺で、住職の女性は涙もろく、法要の間も泣き続け、大切な寺の鐘を日本の協力でとり返したことが住職の心を大きく揺り動かしていると感じられた。

私の近況・関心あること

会員　本山　文子

私の近況・関心あることを、と言えば第一に消費者問題です。食の安全・外食メニュー・食材の虚偽表示、高齢者の悪質商法二次被害等々の消費者被害、2兆円規模といわれる健康食品の安全性や有効性・広告のあり方、そして国民生活に大きな影響を与える消費税増税、特定秘密保護法、農業だけでなく医療・保険・雇用を破壊するＴＰＰと規制緩和など、すべて暮しにかかわる問題です。また、これに対応して住民生活を守る消費者行政や消費者運動のあり方も問われています。

活動としては、働いていた時から続けている県や市町村消費者行政の調査(現在は弁護士・司法書士・消費相談員・消費者団体などで構成する「消費者会議かながわ」）の一員とし市町村訪問やアンケート、県への要望書提出。また、11月24日開催した神奈川自治体学校の実行委員会に参加、くらし分科会「消費者の視点から見たＴＰＰ・規制緩和」を担当しました。コメンテーターとして主婦連合会山根香織さん（食の安全）、県保険医協会小野正司さん（医療・国民皆保険制度）、ＪＡ中央会二宮務さん（農業）で実施。その際、会員の皆さんにご協力をいただき、おかげさまで会場は満杯になりました。

12月10日消費者団体が長年にわたりその実現を求め運動してきた「集団的消費者被害回復訴訟制度」が衆議院、参議院で全会一致で可決・成立しました。私個人はこれまで「特定非営利活動法人消費者機構日本」に参加してきましたが、この神奈川に適格消費者団体つくることが課題と思っています。

頼朝の足跡をたどる旅

会員　白井　洸子

貴族の「京の王権」に対抗して、「東国の王権」確立のたたかいとその意義をさぐるための、「源頼朝の足跡をたどる旅」に行ってきました。

頼朝は1180年8月伊豆の戦いで敗北した後、わずか１か月余の間に東国の多くの軍団の結集に成功し、数万の大軍を率いて堂々の鎌倉入りを果たしています。この時代、東国は、「東えびす」とさげすまれ植民地同様の扱いを受け、国家権力から過酷な収奪をうけていました。1108年には浅間山が大噴火をし、東国全域に甚大な被害を与え、民はますます貧しくなりましたが、大規模開墾がはじまり東国がよみがえっていきます。頼朝は開墾した者に土地を与えて年貢を納める方式へ移行。

その中で、頼朝は、京の圧政を不満に思っている人々を自分の親類縁者や、おさな友達などをよりどころにして、仲間にしながら東国を抑えていきました。頼朝は、伊豆から千葉の猟島（現在の竜島付近）に上陸し（8月29日）、安房一の大豪族からねらわれたものの、友人の三浦義澄が討ってくれ、反抗するものを攻撃し、安房を手に入れ、次々に国の目代を襲って、国に不満を持つ豪族と手を結んで行った。その後、武蔵国の豪族とも手を結んでいった。そして、10月6日数万の兵を率いて鎌倉入りをしています。

今回は、鎌倉学習会議の主催の旅で、横須賀から金谷までフェリーで、そこから安房の国（南房総市）の安西館を見て、市原市では、上総国分尼寺、千葉城（市郷土博物館）へ。翌朝は、埼玉の松山で、畠山重忠の屋敷あと菅谷館跡、国指定遺跡河越館その後小江戸川越を散策。

今のように交通の便の良くない一世紀も前、よくもまあ頼朝さんは歩いたものだと感心。今回はその後をバスで巡ったのですが、講師の児島晃先生のまるで見てきたような頼朝や豪族たちの話にうなずき、穀倉地帯の千葉や、埼玉の広々とした田や畑を眺め、良い天気にも恵まれ、非常に有意義な二日間でした。そして、天皇家とつながった遺跡は非常によく維持管理されているのに、鎌倉は天皇に反対したことで、遺跡がきちんと管理されておらず、遺跡の上には人家や学校が建っている現状から、世界遺産に登録されなかったことも理解できました。

書籍の紹介

●婦団連編「女性白書ー今、女性にとって家族とは」
2013年版
ほるぷ出版　3360円
会員の浅井さんも執筆。

●「アベノ改憲の真実ー平和と人権、暮らしを願う潮流」坂本修著
労働総研ブックレット　840円

映画が好き③

会員　池田　資子

凄まじい形相で女の人が駆け抜けていく映像、「姫の犯した罪と罰」というコピーに魅かれて、アニメ「かぐや姫の物語」を観る。

構想から半世紀、製作期間８年、製作費50億円、全く新しい手法のアニメ映画などの宣伝にも興味をそそられたが、「何故、姫は月の世界から人間の住む地球に来たのか、どうして急に月へ戻らねばならないのか」ということが一番気になる。

ストーリーは誰もが知っている、子どもの頃読んだ『かぐや姫』にほぼ忠実。この物語に隠されている物語とは……。

翁の声を担当した地井武男(故人)は「地球を否定する映画ですか？」と監督に尋ねる。「まったく逆です」と監督は答えている。この監督の言葉が作品の主題になっている。

映像は今まで観たアニメとは異なり、墨彩画のような柔らかな線と淡い色合いで作られている。特に「たけの子」と呼ばれる姫の幼少時代は、野山を駆け巡る子どもたちが貧しいけど幸せな暮らしをしている様子を生き生きと描いている。姫の成長過程や捨丸という少年の存在は原作にはないものであるが、この作品の大切な部分を占めていると思う。

普通アニメの声はアフレコで行われる。しかし、今回はプレスコ(先ず声を録り、声に基づいて画を描く)で作られている。観終わって、プログラムを購入し読んでいると、声優の顔と物語の人物の顔がそっくりではないか。そういうことかと驚き、笑ってしまった。

月の世界に居れば、平穏で老いることもなく暮らせるのに、何のために人間の世界にやって来たのか。姫はどんな罪を犯したのか。人間として生きることが受けるべき罰なのか。

月の羽衣をつけてしまえば、姫は地球での全ての記憶を失う。翁と媼に慈しみ育てられたこと、一緒に遊んだ仲間、嘘をついてまで自分を妻にしようとした男たち、花・鳥・木々の輝きなど、良いことも悪いことも全て愛おしい。精一杯生命の限り生き抜きたいと、姫は気付いたのではないだろうか。「月に戻りたくない」と抵抗しても、もう仕方がない。姫の無念を感じる。だから、今、生きている私たちは気付くべきなのではないかと、この映画は訴えているように思える。

「県立かながわ女性センターを良くする有志の会」のとりくみから（続き）

会員　小島　八重子

2013年11月26日、県人権男女共同参画課長よりかながわ女性センター移転の現状について説明がありました。基本的には今までの内容と大きな違いがありません。「藤沢合同庁舎に①人材育成、②相談、③調査・研究、④情報発信・意識啓発を持っていくことは議会も納得している。補正予算を組んだ移転のための設計予算が議会を通った」と、藤沢合同庁舎は、「古く、暗い。託児所に窓がない」との県議会議員の視察で問題になっていますが、場所や女性図書館と分離することについては問題もあるが実施していきたいとの強硬姿勢は変わっていません。

図書館については、「県立図書館としては、女性図書としてひとまとめにして付加価値を高めたい意向。移管しても、講座などで使用する参考図書は借りて藤沢におくスペースは作りたい。図書利用は藤沢を窓口として借りられるシステムにしていきたい。図書選定委員会に参画課職員を入れ、意見を反映していく」としていますが、有機的な連携については今後の課題です。

事業等に使う会議室が小規模化し事業に支障が出ないかについての指摘に、「合同庁舎の前が藤沢市民会館等施設があるので、藤沢市との連携エリアとして利用していきたい。事業の連携なども市側と話し合いをしている」との回答ですが、はたして県内唯一の女性行政の拠点としての機能が果たせるかは問題です。

かながわ女性センターを良くする有志の会として、12月6日に鈴木藤沢市長と懇談を持つ機会がありました。この間、藤沢市として、移転場所の問題など県に対し話をしてきたことを聞き、「県と藤沢市が協力をして男女共同参画行政をすすめてほしい」との要望を市長に伝えました。市長は、「今回の移転先は、県が決めたことであり、市は関与できない。しかし、かながわ女性センターが果たしてきた役割は大きい、男女共同参画行政の発展のために、県に具体的な要望を出していってください」と、要請について理解を示しました。

私たちは、この移転で女性行政の後退することを許すことはできません。

女性問題の解決のために役立つ県内唯一の「かながわ女性センター」として新しいスタートになるよう、とりくみを強めていく必要があります。